

山原型土地利用とむらづくり (沖縄県名護市・統合計画-6・基本計画-2)

○正会員大竹慶市¹⁾ 同地開昭夫²⁾ 同重村 力³⁾ 同浜田甚三郎⁴⁾
同中村誠司⁵⁾ 同内田栄司⁶⁾ 同菊野憲一郎⁷⁾

Ⅱ 山原型土地利用の認識

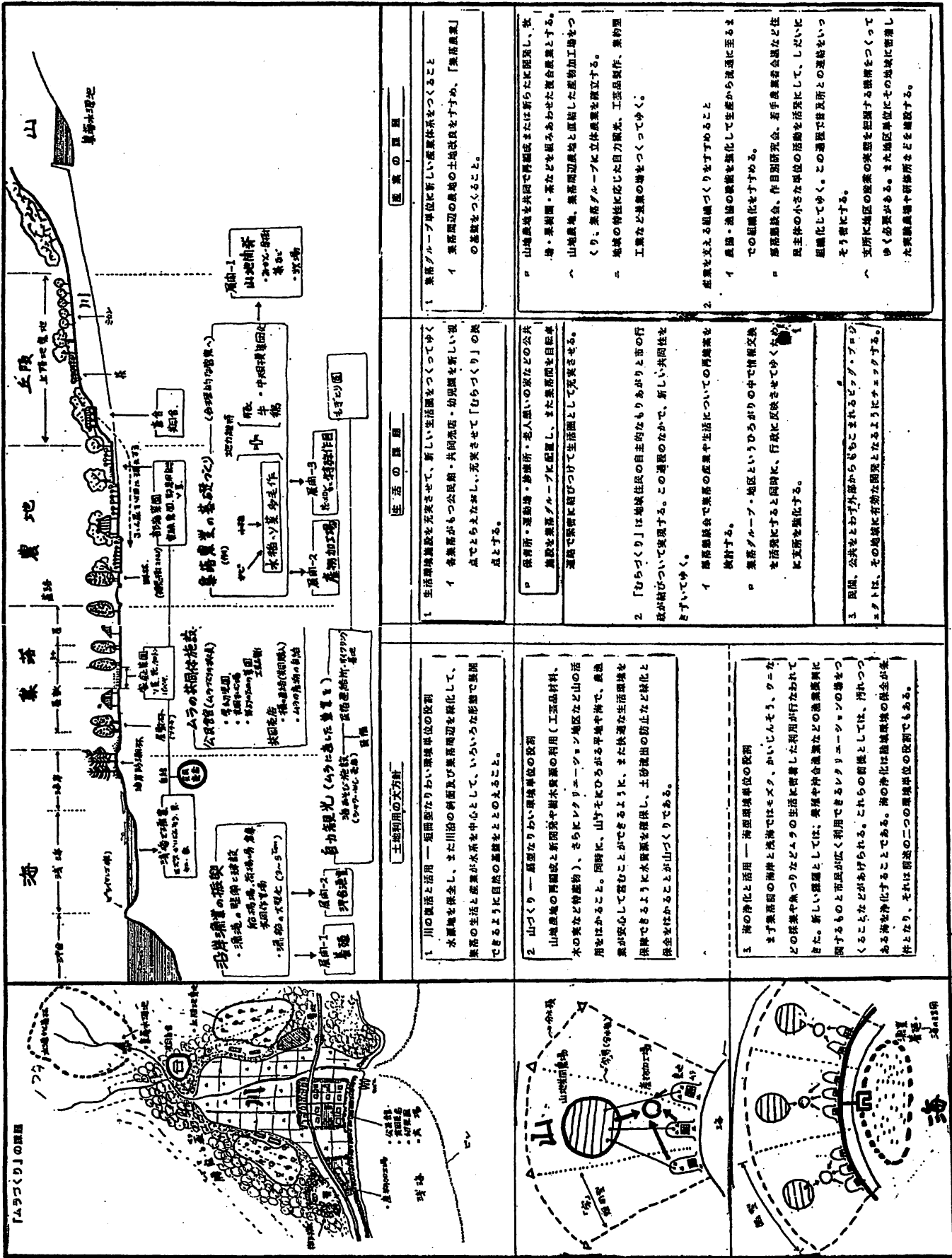
沖縄本島以上に北部は地形が複雑・多様であり農耕地・集落地も細かく区分されている。さらに沖縄の自然は島という閉鎖系であり、陸域の影響は直接に海に及ぼされる。またある部分的な環境の破壊を他の部分で吸収・拡散しようとしても島の中の外まからいって、不可能である。このようなことから画一的・大規模な土地利用形態は望ましくなくその細かな配慮が必要となる。

私達がたずまわった北部の名護市にある今帰仁村の土地利用基本計画において明確な自信をもって作業を展開できたのは「山原型土地利用」の体系を発見してからである。そのきっかけになったのは腰宛森である。かつては「幼児が親の膝に坐っていると同じく、村落民が御嶽の神に抱かれ坐って腰宛何等の不安も感せず安心して採りかかっている状態をさしている。腰宛森はさらに自然地理的な概念をも持ち「季節風地域に位置している沖縄県において、北側に冬風を防いでくれる丘を背にし、それに採りかかっている夏の南風に当たる日当りの良い南側に立地している村落が多い。このような場合も、たとえば、その丘に御嶽がなくとも腰宛森ということがある」(神と村-沖縄の村落仲松彌秀著)。その後、私達のグループで行った今帰仁村の全集落の方言地名の調査^{註1)}から集落と集落周辺の農地を囲む森や丘は、御嶽や坪所や墓所などとくに由縁あるものでなくとも、その集落にだけ通用する独特の呼び名が細かくつけられていることがわかった。丘や森が固有の名前をもちているということは、その集落の生活にとって、深い(かかわり)ありをもつことを意味する。これは海岸林、屋敷林、火田の防風林などの線系とともに台風や塩害、北風から守るだけでなく斜面保全や水源涵養林の役をもっている。そして、集落域を視覚的にも明確にし、かつ、集落ごとに特色のある生活様式や文化をはぐくみ守ってきた森でもある。この集落領域林ともいうべき腰宛森が土地利用計画の重要な要素となったのは次に述べる水系とも(地図の上でも明確なパターンをあらわして来たからである。集落の生業を支える最も基礎的なものは水である。北部の山々は海岸線までせまっている。そして山をまたみ込んだ川は河口に小さな平地をつくり、そこに集落と農地が位置する。飲料水は集落ごとに無理のない小さな貯水池をつくり、集落のそばに小高い丘の上のタンクに水をひき、浄化して各戸に給水する。貯水池の位置は川の本流よりも外部から影響をうけにくい小さな支流を臨む場合が多い。農地をうる水系は山の陵線に囲まれた完結した流域

域として守られる。この流域界は分村した集落を除いては、ほぼ「字」の境界と一致する。「字」のかたちは山から海に至る短冊型をしている。つまり、この短冊型の環境単位の中に様々な生産構造と生活様式をもち、それを支えてきたものは水系であり、その場を守ってきたのは腰宛森とその他の線系という二つがである。私達はこの北部の集落構造を山原型土地利用と名付けて土地利用の基礎単位とした。ここで重要なことは、沖縄の村落は共同体としての結束が非常に強いことである。これは単に精神的なものにとどまらず、公民館、幼稚園、共同売店など必要な生活施設を自らの手で建設し運営している真や農作業におけるユイの儀、いくつかの村落にみる集落農業の定積などにその見ることが出来る。したがって上に述べた基礎単位は単なる環境単位でなく農業を中心とする自力建設の単位となりうる力をもっている。これを短冊型生業環境単位とよび、これを種加で「むらづくり」をすすめる方針とした。

② 山原型土地利用の自力建設

名護の土地利用基本計画では、地形・産業・生活の諸条件からの三段階の環境単位を設定し、それぞれのむらづくりを計画した。短冊型-生業環境単位は前述の水系と集落を中心とする基礎単位であり、その課題は集落農業と産物加工を組合せた新しい産業体系の確立と公民館や共同売店などの集落共同体の施設を充実させて「むらづくり」の拠点としていくことである。次の段階の環境単位は大規模な土地買占めや観光開発と集落間にひろがる丘陵地農地の再編・新開発などの問題に対応するために集落よりひとまり大きな共同性が重要なことから設定された。この字からなる集落グループでは、小学校、学校ビのひろがりがあり、診療所など集落ではもつけない公共施設と、設置するなど新しい共同圏をくりあげてゆくに適當な大きさである。地形的にみると水系群のあつまりであり山を共有する。その課題は新たな共同性をもとに山を活用し、かつ守っていくことである。短冊型の単位が横にならんだその形態から扇型の生業環境単位とよぶ。次の単位は海を共有するひろがりである。(名護は、三つの海をもつ地区であるが、ほかの北部町村はそれぞれ一つの海型ととらえてよいと思う)海の課題は集落の決して生活に豊かさをもたらした海を守ることから出発して、養殖や沖合漁業など本格的な漁業へと展開してゆくことである。沖縄の海は山と直結しており、短冊型-扇型と積みかさねられた陸域環境の守りは海の将来の活用を約束するものである。沖縄の海が今後も美しく、かつ潜在的資源が開花していく上で山原型土地利用の原理は、そのきめ手となっていくであろう。



*1 東京都建設局都市研究所・工修 *2 広島工業大学講師・工修 *3 早稲田大学石坂研究室・工修 *4 首都圏総合計画研究所・工修 *5 名古屋市中区企画室・文修 *6 77中工務店・工修 *7 東京都建設局都市研究所 注1. 方言地名の研究 (平井秀一)

産業の展開

1 集落グループ単位に新しい産業体系をつくること

1 集落周辺の農地の土地改良をすめ、「集落農業」の基盤をつくること。

2 産業を支える組織づくりをすめること

1 農協・漁協の組織を強化して生産から流通に至るまでの組織化をすめ。

2 集落グループに立地産業を確立する。

1 農協・漁協の組織を強化して生産から流通に至るまでの組織化をすめ。

2 集落グループ・地区というものがよりの中で情報交換を活動にすると同時に、行政に反映させてゆくために支所を強化する。

3 農協、公共をとおす外部からもまされるピア・グループ・ネットは、その組織に有効な関係となるようにチェックする。

生活の展開

1 生活環境施設を充実させて、新しい生活圏をつくること

1 各集落がらつ公民館・共同売店・幼児売店・幼稚園を新しい拠点としてつくりだす。充実させて「むらづくり」の拠点をす。

2 「むらづくり」は地域住民の自主的なものがあり市町村の行政が結びついて実現する。この過程のなかで、新しい共同性をとす。

1 集落間競争で集落の産業や生活についての情報交換をすすめる。

2 集落グループ・地区というものがよりの中で情報交換を活動にすると同時に、行政に反映させてゆくために支所を強化する。

土地区画の大方針

1 川の活用と活用 — 短期型ばかりで環境単位の役割を水質を保全し、また川沿いの利便及び集落周辺を緑化して、集落の生活と産業が水系を中心として、いろいろな形態で展開できるように自然の基盤をととのえること。

2 山づくり — 扇型なりかい環境単位の役割

山麓農地の再編成と新開発や樹木資源の利用(工芸品材料、水の質など特産物)、さらにリゾート・レジャー・キャンプ地区など山の活用をはかること。同時に、山すそをひろがる平地や海で、農産物が安心して蓄わることができると、また快適な生活環境を保障できるように水質を確保し、土砂流出の防止など緑化と保全をはかることが山づくりである。

3 海の浄化と活用 — 海沿環境単位の役割

まず集落周辺の海岸と洗海ではモズク、かいじんそう、クニなどの海藻や魚つりなどユラユラの生活に慣れた利用が行なわれてきた。新しい環境としては、集落や沖合漁業などの漁業資源に開するものと市民が広く利用できるレジャー・レクリエーションの場をつくることなどがあげられる。これらの関係としては、汚れた海を浄化することである。海の浄化は緑地帯の保全が条件となり、それは前述の二つの環境単位の役割でもある。

土地区画の大方針

1 川の活用と活用 — 短期型ばかりで環境単位の役割を水質を保全し、また川沿いの利便及び集落周辺を緑化して、集落の生活と産業が水系を中心として、いろいろな形態で展開できるように自然の基盤をととのえること。

2 山づくり — 扇型なりかい環境単位の役割

山麓農地の再編成と新開発や樹木資源の利用(工芸品材料、水の質など特産物)、さらにリゾート・レジャー・キャンプ地区など山の活用をはかること。同時に、山すそをひろがる平地や海で、農産物が安心して蓄わることができると、また快適な生活環境を保障できるように水質を確保し、土砂流出の防止など緑化と保全をはかることが山づくりである。

3 海の浄化と活用 — 海沿環境単位の役割

まず集落周辺の海岸と洗海ではモズク、かいじんそう、クニなどの海藻や魚つりなどユラユラの生活に慣れた利用が行なわれてきた。新しい環境としては、集落や沖合漁業などの漁業資源に開するものと市民が広く利用できるレジャー・レクリエーションの場をつくることなどがあげられる。これらの関係としては、汚れた海を浄化することである。海の浄化は緑地帯の保全が条件となり、それは前述の二つの環境単位の役割でもある。